

直君に教えられたこと

橋本 由美

一学期も終わった。いつもならば、一年生もすっかり学童クラブの生活に慣れ……という書き出しになるのだが、今年はそうじゃない。

「せんせー、竜君が怒るー」と、直君がニコニコしながら室内に逃げて来る。暫くすると、今度はかかんかに怒った竜君が入って来て、直君

に「何やってんだよ！早く来い！」と怒鳴る。

しかし直君は私の背中に隠れて「やだー」と笑っている。それを見た竜君はかっとなって直君につかみかかり、「ふざけんじゃねー。泣かすぞ！」と脅し付け、「さっさと来い！」と直君の腕を掴んで引っ張っていかうとする。腕を

掴まれてやっとな竜君の怒りが本物だと判った直君は、恐くなって「やだーっ」と足を踏ん張り、竜君と直君の引っ張り合いになる。

竜君は二年生。直君は一年生。嫌がる一年生を二年生が無理矢理に引っ張っていかうとしていれば、当然、他の子が黙っていない。しつかり者の二年生の女の子達がささっと集まって来る。「やめなさいよ」「嫌だっって言ってるじゃない」「離しなさいよ」と、口々に竜君を責めたる。竜君が少し怯んだ隙に、直君はさっと手を振り払って逃げ出し、部屋の隅でレゴブロックで遊び始める。

竜君は、喧嘩が大好きで強い。もう一人の喧嘩好き、二年生のみっちゃんと二人で喧嘩のタネを捜しては跳んで行く。もめ事があると仲裁に入り、結局は喧嘩する。本人達は、悪い方をやっつけてやったと思っている。正義感ほめつ

ほう強いのだ。だから、こんなふう弱い者いじめをしているように責められるのは心外だ。

「うるせえっ。ブス!」「こいつが悪いんだよ!」と反撃するが、「どうして直君が悪いのよ!」「あんたが、いじめてんじゃないの」と女の子達は厳しい。

どうしてこうなったのかを説明すればよいのだが、竜君はしない。喧嘩が好きで強いばかりに『困った乱暴な子』として育つうちに、何を言ってもどうせ自分が悪くなるだけ、言っても無駄というふう学習してしまったようだ。それでも一年生の時に比べれば事情を話すようになり、かっとなって手がでるまでの時間が長くなったと思う。

今も直君が悪いのだということまでは言わなかった。よし!でも、そこまでだった。口で勝てなくなつたものだから手がでた。「何すんのよ!」

女の子達も負けていない。足がでた。慌てて間に入る。「ちよつと待って。先生が説明する。直君もこっちにおいで！」と直君を呼ぶ。

直君は、一年生にしては少し幼い。氷鬼のルールも、だるまさんが転んだのルールも、何度教えても判っていない。動作もスローモーターで、ジャンケンは何度やっても後だしになってしまう。

竜君が中心になって「リレーやろうぜ！」「俺もやる！」と盛り上がったところへ直君が、「ぼくもー」と声をあげた。一瞬、しーんとなった。すぐに竜君が、「お前は駄目だ」。「なんでー」「お前が入ったチームが絶対に負けるから、お前がいるとチーム分けができねえんだよ」「やーだー、入りたい」「駄目だつてんだろ！」「入りたーい」と、直君の目が私の方へ助けを求めてきた。



なんとか入れてあげたいなと思いい口を出そうとしたら、側でレゴブロックで遊んでいた吉男君が、「負けるかどうか、やってみなくちゃ判らないじゃないか。やってみないで言うな！」。又、一瞬しーん。竜君はうーんと唸ってから「判ったよ。いいよ。直、来いよ」としぶしぶ直君を入れてやり、他の子達も竜君が言うならば仕方がないと皆で外へ出て行った。ところが、直君はチーム分けの途中で勝手にぬけて室内に戻って来てしまったので、竜君が怒ったという訳だ。

それを聞いた女の子達、「じゃあ、直君も、

いけないよねー」。直君は私の話など聞く気もなく、早くレゴブロック遊びに戻りたくて逃げようとするのを、私が捕まえている。「直君、勝手にぬけたら駄目なんだよ」「ねえ、直君」と女の子達が教えようとするが聞いていない。

「直！ちゃんと聞け！」静ちゃんがすごい剣幕で怒鳴る。女の子達だつて真剣なのだ。直君は、びつくりして静かになる。私は手を離してやる。「ぬける時は、ちゃんとぬけるつて言え！」と静ちゃん。「そうだぞ」と竜君。「はい」と直君。少しウルウルしている。「わかったか」「はい」「じゃ、もういい。行け」と竜君。直君は、すぐに笑顔に戻り、本当に判ったかどうかは少し怪しいがニコニコとレゴブロックの方へ行ってしまう。

「あつたま来るよ、あいつ。やつとチーム分けしたのによお」「そうだよ。今度、又直君が

入りたいって言つたら、先生からももう一度言うからね」「ちえっ」。すると女の子達が「竜君も、すぐ怒るからいけないだよねー」「そう、そう」「すぐぶつし」「そう、そう」と、又蒸し返す。「うっせえよ、ブス！」（ブス以外の悪口を知らんのか）「何だよ、ハゲ！」（竜君は坊主頭。ハゲじゃないのよ）。再び喧嘩が始まりそうになった時、外から、「竜君、早くー」とりー仲間が呼んでくれて喧嘩はおしまい。やれやれ。

自分の世界だけで遊んでいた直君が、他の子の遊びに入りたがるようになってきたのは、とても嬉しいのだが、いつも、こんなふうにぬけてしまつたり、ルールが理解できず周囲を苛々させたりしてもめる。しかし、こんなもめ事をくり返していくことで、直君も周囲の子ども達や私達も成長させられる。

直君は、学校から学童クラブにちゃんと帰って来るようになるまでに二ヶ月近くかかった。

一ヶ月の集団下校が終わり、自分で下校するようになる、学童クラブには来ないで友達の家へあがりこんでしまう。その家のお母さんがいくら学童クラブへ行くように言っても、今日はクラブは休みだからとか、お母さんが迎えに来るからとか、みえみえの嘘をついて動かず、遊びに来られた家からの苦情が相次いで来た。苦情が来る度に、連れに行ったり、お詫びに行ったりで、お母さんも、学校の先生も、私達も、ほとほと困ってしまった。こんなにきつく叱っているのに、どうしてちゃんと行かないのか判らないと、お母さんも先生も苛立っていた。

学童クラブに来てしまえば、全く何事もなかったようにさつさとランドセルを放り出して

遊び始める直君を見て、私達も、どうしてなんだろうと頭を抱えた。とにかく『叱っても何の効果もない』『学童クラブに来たくない何かがあるらしい。それが何なのかは、本人の言葉を引き出すしかない』『来てくれないことには、どうにもならない』と考え、猫の手も借りたい時期できつかったが、直君を迎えに出ることにした。

途中の交差点で待っている私をみつけると、直君は俯いたまま黙って学童クラブの方へ歩いて行き、私はその後ろを少し遅れてついて行くという状態だったが、クラブに着くと、必ず他の職員が、「直君、お帰りー。ちゃんと帰って来て偉いねー」となでなでしてくれるのが気に入ったらしく、お迎えは一ヶ月位でいらなくなった。「せんせー、こっち来てー」と手を引く張つたり、大好きな順子先生がいないと捜

し回ったりという、以前にはなかった甘える行動もでてきて、少し安心と思ったのも束の間。今度は、登室して来ると玄関で嘔吐するようになった。

初めての日は、びっくりして慌ててお母さんに迎えに来てもらった。お母さんは、大して驚く様子もなく、「お医者さんには精神的なものだと言われてます」とのこと。まさかーと思っただが、本当だった。毎日、給食を全部吐いてしまう（お陰で私達は給食のメニューが献立表なしでも判るようになり、子どもに今日の給食は〇〇だったでしょうと当ててみせて、すごい！と言われた）。吐いてしまえばケロリとして、その後は元気そのもので、おまけに沢山のうんちまでちゃんと出る。

そんなに学童クラブの生活がづらいのだろうか、どうしてあげればよいのだろうかと悩んで

いるうちに、嘔吐する時間が、登室時からおやつ前に、おやつ前からおやつ中へと変わり、尿す量も減ってきた。

子ども達も、初めは、直君が嘔吐する度に大騒ぎだったが、今では誰も騒がない。嘔吐の始まりのコンコンという咳が聞こえると「先生！直君！」と、すぐに教えてくれる。職員が側に行かないと代わりにトイレまで連れて行って背中をさすってくれたりもする。竜君の喧嘩仲間のみっちゃんは、「先生、俺にまかして」と言っただけで、上手に背中をさすりながら「全部吐いちゃった方が楽だぞ。吐け、吐け」などと言っ



ている（どこで覚えたんだか）。「汚ない」「又かよー」と言う子もいるが、誰かが「そんな言い方するなよ」「かわいそうじゃない」と庇っている。

直君の嘔吐の時間が、おやつ中に代わったのは、直君のストレスが、クラブの生活全体から、おやつの間だけに代わったせいではないかと思う。そうだとしたら、少しはよい状態になってきているのだが。

一学期の最後の日は、子ども達の大好きなお店屋さんごっこだった。八つの班が、それぞれお店屋さんになり、交代で買物を楽しむ。くじ引き屋さん、輪投げ屋さんといろいろある中で、直君はジュース屋さんだった。コップにジュースを注ぐだけが、食べ物を扱うだけに、嘔吐したら大騒ぎになってしまう。子ども達も、自分達で考えたお店だから変える訳には

いれない。目を離さないようにノと思っていたが、とてもそんな状態ではなく、忙しくうごきまわるうちにいつの間にか視界から直君は消え、気がついたらお店屋さんごっこは終わっていた。直君は嘔吐しなかった。

直君ほど、クラブの生活に仲々慣れない子は、私は初めてだ。今後は、こういった子が増えるのではないかと思う（直君ほどではないが、今年にはクラブに慣れるのに時間がかかる子が多かった）。子どもの変化にあわせて、学童クラブの保育も変えていかなければいけないことを教えられた今年の一学期だった。

（江戸川区立船堀第三学童クラブ）